

日本のテレビ番組を見て芽生えた 日本文化へのあこがれ

北京市内のホテルに勤務する張さん。経済が発展途上の中国で、観光はこれからの重要なビジネスになると考える張さんは、日本の観光ビジネスを学ぶため来日しました。数ある国から日本を選んだ理由は、小さいころに芽生えていた日本へのあこがれです。

「小学生のころからドラマやアニメなど北京で放送される日本のテレビ番組が大好きでした。特に印象に残っているのが、『阿信』（日本題名『おしん』）や『排球女将』（同『燃えるアタック』）ですね。テレビを通して見る日本の経済や文化、自然にぜひ一度触れてみたいと思っていました」。

北京市民よりも高いと 感じる登別市民の 環境への意識

来日して約3カ月。徐々に日本の生活に慣れてきた張さんですが、なじめないのが日本の物価の高さ。

「北京の大卒者の初任給は、日本円にして1万4千円から2万円くらい。日本に比べると随分と低いです。物価が安いため生活には困りません。例えば、登別ではネギ1束の値段が100円前後ですが、北京では約7円で買うことができます。いくら給料が高くて物価



▲登別地獄谷で観光ボランティアガイドの方に話を聞く張さん

が高ければ暮らしは裕福に感じませんね」と複雑な表情で話します。「北京では、天安門広場など外国から多くの人が訪れる場所は、ゴミを捨てるのと罰金を課し清潔さを維持していますが、街全体は日本の方がずっときれいですね。登別は、道路の街路樹など緑が豊富で、家々は花や芝生で美しく飾られています。登別の方は、北京市民よりも環境への意識が高いと感じます」と登別の印象を話す張さんは、8月から登別温泉のホテルなどで実地研修しています。

「日本では観光客をどう誘致し、どのようなサービスを提供しているのかなどを勉強したい。将来は北京を訪れる登別の方を温かく迎えたいですね」と抱負を聞かせてくれました。



KIRARI

チャン ホン リィ
張 紅莉さん

外国の地方自治などを学ぶため、総務省などが行う自治体職員協力交流事業の協力交流研修員として、今年の6月、中華人民共和国の首都北京市から来日した張紅莉さん。

11月下旬まで、登別温泉などで日本の観光ビジネスを研修するのをはじめ、日本文化の体験に意欲を燃やす張さんに、登別の印象などを聞きました。

日本の観光ビジネス をしっかりと勉強したいです



1975年北京市生まれ。25歳。
北京旅遊学院で4年間観光や日本語などを学ぶ。卒業後北京市内のホテルに就職。秘書を経て現在営業部でセールスを担当。趣味はスケッチや音楽鑑賞など。